

特集 「室町・戦国時代の大磯近辺の戦い」IV 武山 加根子

IV 長尾景春の乱

この戦いは、すでに起こっていた「享徳の乱」の最中、文明8年(1476)から文明12年(1480)にかけて、関東管領・山内(やまのうち)上杉氏の家臣長尾景春が、古河公方・足利成氏(しげうじ)と通じて起こした反乱である。文明5年(1473)、山内家の家宰・長尾景信が死去した。息子の景春は、家宰職を自分が継ぐものと思っていたが、山内家当主・上杉顕定は、景春の叔父の長尾忠景に家宰職を与えてしまった。景春はこの人事を恨んで、従兄弟にあたる扇谷(おおぎがやつ)上杉家の家宰・太田道灌に協力を求めたが、応じなかった。

文明8年(1476)6月、景春は武蔵鉢形城(埼玉県寄居町)において、古河公方と結び反旗をひるがえした。景春は2500騎を率いて、上杉方の最大の防御拠点だった五十子(いらこ)の陣(埼玉県本庄市)を攻略、上杉顕定と扇谷家・上杉定正は敗走した。これに同調して関東各地で景春に味方する豪族たちが蜂起した。

文明9年(1477)3月18日に上杉方の太田道灌軍は厚木の溝呂木城に攻め入った。城主・溝呂木正重は景春の家来となり、相模川・中津川・小鮎川の三川が合流する辺りに要害を築いていた。道灌軍が近づいてくると、戦うことを避け要害に火をつけて、相模川の上流の磯部城に逃亡したと思われる。

道灌軍はその日のうちに大磯の小磯城に向かった。景春の被官・越後五郎四郎が立て籠り、激しい戦闘の末、夜中に落城した。山城のあった推定場所は、城山公園の管理事務所の横、掘切をのぼった右側の辺りには物見櫓(ものみやぐら)、展望台のある所には主郭(城郭)があり、少し下って鞍部の先の光の広場には、2郭(城郭)が有り、その一段高いところにも櫓(やぐら)があったと思われる。そこから降りていくと腰曲輪(こしぐるわ)的な平場があり、さらに城山庵のある辺りにも、山麓の曲輪(くるわ)があったのではなかろうか。西に不動川、東に血洗川が流れ、南は土塁状に海岸砂丘がめぐり、まさに天然の要害である。城山の東側は主戦場で多数の塚があり、小磯城の城兵と、道灌軍の兵の戦死者の墓と伝えられ、現在は共同墓地になっている。丘陵の北側の中腹にある「城山荘温古の碑」には、その歴史が刻まれている。



城山荘温古の碑

道灌軍は、小沢(こさわ)城(愛甲郡愛川町)の城主・金子掃部助(かもんのすけ)を攻めるが守りがたく、攻め落とすのに1ヶ月ほどかかり、文明9年(1477)4月18日に落城した。翌年、文明10年(1478)1月、道灌軍は横浜の小机城を攻撃する。景春に味方した城主・矢野兵庫助(ひょうごのすけ)らが立てこもり、2ヶ月の籠城ののち落城し、相模から景春方の城を一掃した。さらに武蔵南部、北武蔵、上野、下野の各地を転戦し、最後の拠点日野城(秩父郡荒川村)を、文明12年(1480)6月24日に陥落させ、4年間にわたる「長尾景春の乱」が終わった。2年後の文明14年(1482)、28年間つづいた「享徳の乱」も終結した。

太田道灌の活躍で戦いは鎮圧されたが、上杉顕定の権威は落ち、反対に道灌の主君である上杉定正の権威は上がった。しかし道灌は、顕定の画策により、主君・定正によって文明18年(1486)、糟屋館(伊勢原市)で謀殺される。道灌の死を機に再び両上杉の間では、18年間に及ぶ「長享の乱」が勃発、群雄割拠の時代の幕開けとなった。次は伊勢宗瑞(北条早雲)の攻略を採り上げる。(つづく)

【編集後記】大磯地区のまちあるき、国府地区の自然・文化散策などが楽しめる大磯町、巻頭で大磯・国府の合併70周年を挙げ、先人たちの苦勞とその後の発展に想いを馳せ、特集の「室町・戦国時代の大磯近辺の戦い」は4回目を迎え、太田道灌が越後五郎四郎を攻めた大磯小磯城の戦いが紹介されました。酷暑の夏の間、企画ガイドはひと休みして、会員向けに西園寺公望の終の棲家である興津坐漁荘、吉田五十八設計の東山岸邸への研修旅行や救急救命講習などを行いました。秋になり、企画ガイドや共催ガイドを再開するとともに、来たる「明治記念大磯邸園」部分開園に向けた研鑽に励み、皆さまをお迎えする準備を進めています。(小泉 秀彦)



NPO法人 大磯ガイド協会

照ヶ崎

第59号
令和6年11月1日

〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯 1933-1
TEL 0463-73-8590
ホームページ <https://www.oisoguide.com>



大磯・国府合併70周年に想う

吉川 武士

いつもあたりまえのように見ている海や山の景色。ガイドしている時によく聞く「緑が多くて良い町ですね」とのお客様からの言葉。しかし永い間、開発の波にさらされながらも保たれてきた緑ゆたかなこの町にも、大勢の先人たちの「言葉に表せない多くの苦勞があった」との事を若い頃、お年寄りから聞いた。その話を思い出すと全く頭の下がる思いである。今年12月に大磯町と国府町の合併70周年を迎えるにあたって、今回、「自主的発展か、合併か」そこに至るまでの先人たちの多くの苦勞を振りかえってみたい。

昭和28年(1953)10月1日、町村の組織及び運営の効率化と住民の福祉増進を目的とした「町村合併促進法」の施行を機に、各地で合併に関する機運が高まりつつあった。この地でも例外ではなく、昭和29年(1954)4月、二宮、国府、大磯の「三町合併協議会」が開催され、このなかで各町長は「あらゆる点から見て、三町が一体となって進むことは当然であり、そうすべきである」と述べている。6月26日の三町合併研究会で大磯町と国府町は速やかに三町合併の具体化を強調したが、二宮町が下中、前羽、中井が合流した六ヶ町村の合併を強硬に申し出た。大磯町と国府町にとって全く予期しなかった事であり、また二宮町の意向も変わらず、この問題は一時保留することとした。

その後8月20日、二宮町より再度「三町合併の線を進みたい」と改めて申し出があったが、庁舎の位置選定や二宮町内部の意見対立などが顕在化し、協議は不調に終わり、止むを得ず三町合併促進協議会は解散することになった。そのことにより大磯町・国府町内には多少の合併反対意見はあるものの、大方の意見としては「速やかに大磯町、国府町の二町合併の実現に向かって進むべきだ」との声が高まり、9月10日「二町合併促進協議会」が結成された。新庁舎は従来までの大磯町役場を使用する、名称は大磯町とするなどの協議が成立し、昭和29年(1954)12月1日、新大磯町が発足した。4年後に再度二宮町と合併協議をしたが実現しなかった。発足時の人口は22,087人、戸数は4,178戸であり、町役場は旧大磯町役場に、支所が旧国府町役場に置かれた。その後、町役場新庁舎は昭和46年(1971)年6月、東小磯の現在地に建てられた。

昭和39年(1964)合併10周年を迎え公募により町章を制定した。大磯の「大」の字を三つ組み合わせさせた町章は町民の飛躍発展、勤勞、友愛を表す。



昭和29年10月大磯町・国府町合併協議成立
写真提供：大磯町郷土資料館



大磯町 町章

——企画ガイド「頼朝ゆかりの鎌倉道を歩く」——

9月14日(土)17(火) お客様35名 ガイド10名

鎌倉道というのは一本ではなく、大磯にも山側と海側の鎌倉道がある。今回は海側の道経由で、大磯駅から平塚宿京方見附までの約5キロを先輩ガイドと共にご案内した。現在とは違う鎌倉時代の地形を意識しながら坂を下り、鳴立庵の横から下町通り(漁師町)へ。大磯の鎌倉道は、東海道と並行したり交差したりしながら、かつて鎌倉武士達も通った化粧坂へと続いていく。「え？ココを通るの？」とお客様が驚くような細い路地を通り、見落としそうな小さな石塔や道祖神を説明することも。そうした場所も、先輩ガイドの解説後にはお客様が興味津々の顔に変わっていく様子が嬉しい。そして高来神社では特別に拝殿に上がらせて頂き、福田会員による南濱木遣『権現丸』に聞き入った。これは高麗人若光が大磯の浜に着いた時の様子を伝える歌とされる。そこからは残暑の中をもう一踏ん張り。頼朝が前夜の嵐で桜が散った為、花を見ないで帰ったという逸話も残る「花水(見ず)川」からいざ平塚へ。時間が迫り慌ただしい解散となったが、「とても楽しかった！面白かった！」と笑顔で言って頂き、汗も疲れも引いていく思いがした。(松下 綾子)



高来神社 拝殿

——企画ガイド「大地の誕生の秘密を探る・大磯地区」——

10月5日(土) お客様45名 ガイド11名



吉田邸南側海岸・大磯層

大磯の別荘文化が花開く要因となった大地の恵みが、いつ頃どのように形成されたのか、その誕生の秘密を探るまち歩きである。大磯駅前をスタートし、県道610号を下り国道1号へ。西に向かいエリザベスサンダースホーム南側を通り照ヶ崎海岸へ向かう。再び国道1号から西へ歩き、八坂神社から海岸へ出る。こゆるぎの浜から旧吉田茂邸を目指す行程5キロ、3時間のまち歩きツアーである。1500万年前という大磯で最も古い地層である高麗山層から切り出された石垣や、700万年前の大磯層の石材を利用した門柱などを見ることができる。非常に珍しいという3段の海岸段丘地形や、吉田邸南側にはっきりと露出している大磯層を見ながら、大磯の地形の成り立ちを体感するツアーになった。「日本沈没」という映画があったが、実際には日本は全体的に「隆起」しているという。大磯を見ていると大地が隆起していると強く実感する。遙か未来の大磯はどんな地形になっているのか想像してみるのも面白いだろう。お客様からは「地層の話は初めてだったので面白かった」との感想を頂いた。(川崎 裕)

——共催ガイド「安田邸・明治天皇観漁碑散策」——

10月12日(土) お客様58名 ガイド11名

晴天に恵まれた3連休の初日、旧安田善次郎邸(庭園・邸宅)の見学及び、「寿楽園」から善次郎翁が建立した「明治天皇観漁碑」を散策した。お客様は少々息を切らしながら石碑や持仏が点在する「寿楽園」の散策を楽しまれました。往時なら相模湾が一望できたであろう王城山の眺望が現在は失われていることを残念がられていた。その後尺八の音が静かに流れる中、2代目善次郎が再建した旧安田善次郎邸を見学した。初代善次郎翁の遺徳が偲ばれるとともに、随所に意匠を凝らした邸宅や安田鞞彦画伯設計の建造物にお客様も大変興味を持たれた様子であった。(宮川 正弘)

——キッズ講習会『鳴立庵って何だろう?』——

7月28日(土) お客様12名 ガイド4名

地元の方でも、鳴立庵が江戸時代から続く俳諧道場だということを知る人は少ない。昨年に続くこの共催企画は、夏休み中の子供達にも、この由緒ある史跡に親しんでもらおうとする試み。参加者は小学生のご家族連れからご年配の方まで、幅広い年代だった。子供向けの講座とはいえ、西行法師や正岡子規にまつわるエピソードなくして鳴立庵は語れない。小学生にも分かりやすい説明をと、各ガイド担当は知恵を絞った。①鳴立庵の始まりの謎、②湘南発祥の地の謎、③カエルの像の謎、の3つを解き明かした後、庭内を歩いた。庵室に戻り、俳句作りに挑戦。詠んだ俳句を風鈴の短冊に清書してお土産とした。「いつも前は通っているけれど、今回鳴立庵のことがわかってよかった。」等の感想をいただいた。蝉時雨の中、庵の歴史と閑かさを堪能できるガイド体験だった。(川崎 亮子)



——研修旅行 興津「西園寺公望別邸」を訪ねる——

8月24日(土) 参加者42名



西園寺興津別邸跡(復元)

午前中に第一の目的地興津に到着し、清見寺と西園寺公望別荘の坐漁荘を見学。清見寺は家康幼少の頃勉強したことで有名だが、朝鮮通信使の一行が立ち寄った記録も残っており大磯に通じるものがある。西園寺公望元首相が気に入り終の棲家となった別荘「坐漁荘」は当時を忠実に再現した屋敷が整備されており、多数の写真や遺品が残っている。午後は御殿場にある、秩父宮記念公園と東山岸邸を見学した。秩父宮別邸は大磯にもゆかりの井上準之助の別荘を秩父宮が病氣療養のため別邸として使用し、勢津子妃が新館を増築して平成7年まで暮らされた。そこから比較的近い東山岸邸は昭和44年に岸元首相が新築し、亡くなる昭和62年まで住まれた終の棲家となった。全館吉田五十八の設計による集大成とも言われ、広大な庭園との調和が美しい。いずれの見学先も現地のガイドに説明していただき、大変有意義な研修旅行だった。(今宮 督)

——会員研修「明治記念大磯邸園」——

9月21日(土) 参加者64名

11月23日よりいよいよ「明治記念大磯邸園」の一部公開が始まります。それに先立ち、当初からこの歴史的建造物の修復事業に携わってこられた、関東学院大学名誉教授の水沼淑子先生をお迎えして、学術的な立場での講演会を、福祉センターさざれ石にて行いました。大磯に現存する邸園文化遺産についての膨大な関連資料により、その履歴や建物の変遷の根拠が明らかにされ、それに基づき修復が行われたとのこと。ガイド協会でも今まで示されていた事例の修正や確認、また新たな発見も加え、今後のガイドに反映できるように学びなおしをしています。11月26日よりしばらくの間、ガイド協会では邸内のガイドを行います。(三田村 洋子)

——今後の企画ガイド他予定——

No.	月日	企画ガイド(略称)	No.	月日	企画ガイド(略称)
1	11/10(日)12(火)	アドベンチャーハイキング	4	12/8(日)	インスタ映えスポットツアー
2	11/30(土)	共催:城山庵お点前	5	12/15(日)	会員研修:神仏習合・寺社建築
3	12/6(金)	共催:明治記念大磯邸園	6	1/12(日)	「左義長」を訪ねる